

笑顔

コンビニに寄るんじゃなかった。

そう思った頃には時すでに遅し、俺は気づけば地面に横たわっていた。

「にいちちゃん、大丈夫か？」

目を覚ますと、視界に薄汚れた髭面。

俺の顔を覗きこんできたホームレスのおっさんは顔に笑みを浮かべていた。

見世物じゃないんだぞ、と言いたところだが口の端が切れているから痛みでしゃべるのも嫌になる。

「いッてええええ！」

おっさんの言葉を見殺しして体を起こせば体のあちこちに痛みが走った。

思わず大声を上げて、散々女に持てはやされた自慢の顔を目一杯歪めた。

こんな情けないところ、俺のガールフレンド達に見られなくれ良かった。

必死に声を抑え、歯を食いしばるが顔はどうにもできない。

「あいつ等、俺を何だと思ってやがるッ！」

怒鳴る俺の脳裏に浮かぶのは先ほど、ここで馬鹿みたいにグラグラと笑っていた中学生達だ。
そんな中学生にやられる俺は情けないが、一人と十数人とではさすがに敵わないのも事実だろう。

「…あ？」

何とか立ち上がった俺の前に立っていたのは先ほどのホームレスだった。

近さも近さなので風呂には随分入ってないのだろうと思わせるほどの異臭が鼻についた。

もしもあの中学生たちがもう少し手加減をして殴ってくれば今頃この爺さんをぶちのめしてやるところだったのだが、どうにも腕の骨にヒビが入っているようで動かすのも容易ではない。

むしろ痛みに耐えるので精一杯なのだ。

そんな時にこのおっさんは何を考えているのか、相変わらず笑って俺を見つめている。

「…んだよ」

「いやね、何ならおじさんが病院まで連れて行ってあげようかと思ったんだけど」

その様子だったら大丈夫みたいだね。

おっさんは何を考えているのか分からないような笑顔を浮かべた。

こいつ、絶対何か企んでやがるな…と推測した俺はほんの少し間合いをとった。
警戒心をむき出しにする俺を見ると今度は眉を下げて苦笑いをするホームレス。

「大丈夫、何もしないさ」

「ふん、ホームレスの言う事なんか信用できるかよ」

「・・・ふむ、それもそうだね」

何一人で納得してるんだ。

顔を引きつらせたせいでピリッ、とまた痛んだ。

こんなヤツをいつまでも相手にできるか。

俺は体を反対方向に向け、少し遠回りになるものの病院に向かうことにした。

「そんな足で、独りじゃ大変だろう…？」

「っ！触んじゃねえよ、臭えのがうつる！」

「あ、…すまない」

「謝るくらいなら最初から触んじゃねえよ、糞ジジイ」

ビリビリ、電気が走るように足が痛い。

おっさんの言う通り、確かに一人で病院に向かうには無理があるかもしれない。

しかしこんな男に運を売るのは性に合わないし、何より格好悪いじゃないか。

病院に向かうのでさえも格好悪いというのに、こんな汚いのが一緒じゃ尚悪い。

だがこのおっさんは先ほど俺があんなに怒鳴ったにも関わらず怪我がまだ軽い右手の手首を掴んだ。

「やっぱりついて行くよ、右足、痛いんだろう？」

俺は驚いた。

別にこのおっさんが俺の言葉を見殺し、下がることをしなかったからではない。

俺は先ほどから気づかれないようにしていたのだ。

ヒビが入っているであろう左手も、さっきから右足のひざに走る痛みも、気付かれないように隠していたのだ。

そんなに分かりやすかったか？

いや、違う。

このおっさんは確かに汚いホームレスではあるがそれなりに洞察力があるらしい。

まあ、だからと言って俺がこのおっさんに気を許す理由にはならない。

「離せよ、臭いって言っただろ。まさか聞こえなかったなんて言うんじゃないだろうな」

「聞こえたよ、しっかりとね。だけど怪我人を一人で病院に行かせるわけにはいかないだろう」

「は、何だよお前」

さつきと様子がおかしい。

さきほどまで人を馬鹿にするような笑顔を浮かべたり、何か企んでいる素振りを見せたりしていたおっさんが随分と態度を変えて生意気に真剣な目をする。

「…へえ、ホームレスのくせに正義感が強いってことか。だがな、俺がテメエみたいな臭い男と一緒に並んで歩く訳ねえだろうが。わかったらその汚い手を離せよ偽善者ジジイ」

「離さない」

「…：離せよ、ホモ野郎」

「何を言われようが、僕は君を病院に見送るまでこの手を離さない」

「な、んだと！！？」

それは絶対に御免被りたい話だ。

こんなおっさんと病院まで手を繋いで？出来るわけないだろうが！

「僕はね、医者をしてたんだけ」

「んなの、…は、医者？」

「歯医者ではなく小さな病院で外科医をしていた」

「聞いてねえよ」

こんなおっさんが医者？

俺の父も医者ではあるが、金に目が無いとんだクズ野郎だ。

お陰さまで何不自由なく育ってきたし、父がいるからこうやって好き勝手できると言える。
しかしこのおっさんに「医者」という文字を当てはめるには少々難しい。

「お前が医者？おっさん、騙す相手を間違ってるぞ」

「嘘じゃない。どうしても信じられないなら君のこれから行く病院で僕の名前を出せばいい、きっと知っている人がいるはずだよ」

と、言われたもののやっぱり信じられない。

結局おっさんは頑として言う事を聞かなかったので仕方なく人気の少ない道を通って病院に向かう事になった。
おっさんは本当に病院までついてきた。

病院の裏口で俺が扉を閉めるまですつとこちらを見ていた。

最後まであの男が企んでいることが何なのかわからなかったが、とりあえず名前は聞いておいた。

「父さん、三坂英十郎って知ってるか？」

「三坂…ああ、あの男か」

「え、知ってるのか…？」

まさか本当に医者だったのか…。

なるべく驚いた顔は表情に出さないようにしたが、今でも信じられない。

あんなおっさんが医者とは、やっぱり想像できない。

「何でお前があんないけ好かん男の名前を知っているのかは聞かないが、アイツはとんだ阿呆だぞ」
「あー…」

なんとなく、分かる気がする。

雰囲気から言って騙されやすそうな感じが伝わってくる。
想像したら少し笑えて来た。

「欲も少ない男でな、騙されて医者免許の取り上げられるような男だ」

「そうなのか…?」

「ああ、そうだ…俺がした医療ミスをアイツに擦り付けてやったんだ。適当に言いくるめてやれば、あの男は簡単に納得してくれたよ」

とんだ暴露を父さんはペラペラと喋ってくれた。

本当に根っからのクズだ、ということとはよくわかった。

昨日、あそこであつたのはただの偶然ではなかったらしい。

縁がある、というのだろうか。

自慢話をする父さんの横で、俺は聞くふりだけをしておっさんのことを思い出していた。

「しかしアイツの娘は優秀だ」

「娘がいるのか…？」

「まあ、今は俺の下で働いている看護助手だが…父親と比べて人との付き合い方というものを十分に心得ている娘だよ。見た目も申し分ないしな…父親があんな阿呆でなければ嫁にもらってやったというのに」

「は…？何言ってるんだよ」

「お前は将来俺の後を継いでもらうことになるから今のうちに結婚相手を見つけておいて悪いことなどないだろう？」

「俺がアンタの跡を継ぐだって…？笑わせんなよ、糞ジジイ」

「…今何と言った？」

頭にじわじわと血が上るのを感じた。

思わず怒りを抑えられずに言葉を発してしまった。

それが引き金に、俺は止むことのない言葉を浴びせることになってしまった。

全てを言い終わる頃には父さんの顔は真っ赤になっていた。

目は血走り明らかに怒っているのが見てとれた。

「…自分が、何を言っているのかわかっていいのか」

震える手に無駄に籠った声、怒りを抑えているのはよくわかった。

やってしまった、と思わず呟きそうになる。

こんな怪我さえなければ、中年のジジイともやりあえたんだが…ここは一先ず笑って誤魔化すか？それとも素直に誤るか？…どれも嫌だ。

「分かってる、と言ったら？」

「…しばらく、外出禁止だ。学校にも行くな、代わりに家庭教師を雇う」

「おいおい、出席日数は、」

「お前は口を挟まなくても良い！全て俺の言う通りにしている」

ああ、やっぱりか。

何となくそう言われるのではないかと思っていた。

わかっていて言った俺も俺だが、ここまで言われると俺も引けなくなってしまう。

「わかった」

「…そうだ、お前はそうやって俺の命令だけを、」

「俺、出ていくわ」

「な、何をいつているんだ！？」

早足で部屋を出て、玄関に置いたままの荷物を肩にかけて家を飛び出した。

後ろから父さんの大きな声が俺を引きとめようとしたが、俺の脚は止まることはなかった。

「それでここに来たのかい？」

「別に、気まぐれ。ただ、どの彼女の家に行くか決めるの面倒だったただけだしな」

「そうかい、それでも僕は君が来てくれてうれしいなあ」

「…」

昨日と同じ服を着たおっさんからは、昨日と同じ匂いがした。

俺が自分を騙した男の息子であるのに、俺は昨日あれだけ暴言を吐いたのに、男はただ目を細めて俺にほほ笑みかけていた。俺にはそれが理解できなかった。

企んでいる訳ではない、本当に純粹に喜んでいるだけなのだ。

「…だから騙されんだよ」

「え、何か言った？」

「…何にも言ってねえよ」

この男はそれなりに頭が良く、とても真面目。

だが純粹で單純なのが裏目にでて騙される、損な人間なんだろうと思った。

前まではこんなこと思わなかったが、今は俺も阿呆で損な人間なのかもしれないと思う節がこの男を見ているとつい考えてしまう。

「…アンタ、娘がいるんだってな」

「ああ、それも聞いたのかい？…まあ、いるにはいるんだが…、あの子がまだ小さい頃に医者免許を取り上げられてしまつてね、妻は娘を連れて出ていってしまいそれから音信不通だよ」

情けない話だろう？と笑いながら言うおっさんに、俺はどうしても馬鹿にすることが出来なかった。

「本当に情けなくて間抜けな話だ」と笑い返してやればいいのに、何故だか出来なかった。

「なんつう顔で笑つてんだよ…ばっかじゃねえの？」

「え、いや…まさか君からそんな言葉が帰ってくるとは思わなかったなあ」

「ふん、そりや残念だったな」

「そういうわけではないんだけどね？」

少し寒くなってきた夕暮れ、俺は腰を上げてベンチに座るおっさんを見下ろした。
何処に行くんだい、というおっさんは馬鹿みたいに寂しそうで、気持ち悪かった。

そんな顔を男の俺に、しかも自分を騙した男の息子に向けるんじゃないやねえよ、と内心思ったが口には出さずにいた。

「どの彼女の家に行くか決めた」

「そうかい…じゃあお別れだね」

「そうだな」

「…」

短い沈黙が続く。

居心地に悪さに舌打ちを打ちたくなったが、ふいに頭に浮かんだことに舌打ちを打つ代わりに考える素振りをおっさんに見せた。

「ほら、」

「えっと…これは？」

「あ？見てわかんねえのかよ…携帯だよ、携帯！」

「それはわかるんだけど」

「だったらそれで娘に連絡でも入れろって言ってるんだよ…」

「え…」

ぽかんと口を開けて呆けるその顔に可愛らしい殺意が芽生えたものの理性で抑えることは容易かった。

呆れてため息をついた俺に向かっておっさんは、俺の言った事をようやく理解したようで、おずおずと「君って優しい子なんだね…」と言った。ふざけんじゃねえ！

顔を歪めながらニコニコ笑う男を見下ろした。

「だけどごめんね、しばらくあつてないもんだから電話番号知らないんだよ」

「・・・アドレスにアンタの娘の名前が入ってたんだろ」

「・・・それは父親としては詳しく話を聞きたいところだけど…やっぱり父親らしく何か言った方がいいのかな？」

「俺にそれを聞くなよ。…別にオヤジの働く病院でいい女を見かけたからケー番とメアド交換しただけだったの」

「そうかい、そうかい…ありがとうね」

「…どこの年寄りだよ」

ニコニコとほほ笑んだままの男にむず痒くなり俺は逃げるようにその場を後にした。

その夜、俺は何人かいる彼女のうちの一人の家に泊らせてもらった。

怪我の心配をしていたが、要は俺の「カラダ」が心配なだけであってあとはどうでもいいんだろう。

その上、「顔にあまり怪我が無くてほっとした」とのお言葉だ。

どいつもこいつも人の顔の心配ばかり、俺はもう少しまともな女と付き合った方がいいのかもしれないと思い知らされた。

「・・・また来てくれたんだね」

俺はこのおっさんの笑った顔が嫌いだ。

彼女の香水が染みついたまま出てきたから余計に気持ちが悪い。

シャワーを浴びてくればよかったと後悔したが、今さら遅いわけで。

「出ようかどうか迷ったんだけどね？君のお父さんから沢山着信が来たんだ」

今は落ちつつたけど、昨日の晩はうるさかったよと結構はつきりモノを言う。

そう言うところもあるのか、とほんの少し開心しつつ俺はおっさんが差し出した携帯を受け取った。

携帯を開けると、確かに気持ちが悪いくらいの着信があった。

九割は「オヤジ」の文字で埋まっている。

「君のお父さんも君のことを心配しているんだよ」

「んなわけねえだろ・・・ってかお前はどうかなんだよ」

「ああ、それがね・・・話し中だったみたいで繋がらなかったんだ」

「・・・それは残念だったな」

「うん、せつかく君が電話番号まで聞いてくれたのに、本当にごめんね」

別にお前のためじゃない。

おっさんから受け取った携帯をポケットに仕舞い、頭を掻いた。

なんで俺が残念がつているんだ、俺は曇った空を見上げてため息をついた。

冬も近づき、口から吐いた息はほんのり白くなる。

隣のベンチに座っているおっさんは俯き加減で、声を漏らすように「本当にごめんね」と謝った。

それが俺に向かったの謝罪なのか、それとも娘に対してたのか…感情の含んだ謝罪だったがどちらなのかははっきりしない。

だがこの男に罪はないと言う事だけは、はっきりと俺にでもわかった。

「何で謝るんだよ…ったく」

「あれ、もう行っちゃうのかい？」

「ちよっとそこの自動販売機に行ってくる。別に何も言わず帰ったりしねえよ」

「・・・そうかい」

「笑ってんじやねえぞ、ハゲ」

「失礼だなあ、まだ禿げてないよ」

やっぱり、俺はこのおっさんの笑顔が嫌いだ。

心臓のあたりが熱くなつて、それからついそわそわしてしまう。

そんな自分が、あの笑顔よりも嫌いなものにな。

「次は君の番だね」

「は、」

おっさんの言葉に足を止め振り返ってしまった。

そんなおっさんはやっぱり笑顔で、まるで誰かを送りだすような顔をしている。

不思議と、悪い気はしなかった。

「お父さんとはちゃんと話しあわなきゃ…それから、女の子と遊ぶのは良いけどそろそろちゃんと好きな子を見つけなきゃ」

「最後のは余計だ。つか父親みたいなこと言ってるんじやねえよ」

「はは、それもいいね」

「ぜってえ嫌だ」

つい、目を逸らした。

それもいいね、おっさんの言葉に喜んでるほど俺も暇じゃない。

父さんと話をつけようと思っていたのは事実だが、俺が気にしてた事まで心配される筋合いはない。だからと言ってやはり悪い気はしなかったのもまた事実で。

買ってきた缶コーヒーを一つ、おっさんに手渡す。

買ったばかりの缶コーヒーはまだ熱を持っていて、特別寒い今日にはちょうど良かった。左手は使えないから僕が開ける、というおっさんの申し出はもちろん断らせてもらった。

「僕が開けてあげたのに…」

「アンタって変なところで頑固だよな」

「それは君も同じだろう」

「は？…んなわけねえじゃん」

「ほら、やっぱり」

「いや、これは違うだろ」

俺は鼻で笑ってコーヒーの飲み口に口をつけた。

「違うないよ」

おっさんにはつきりそう言われるともう言い返すのが面倒になってしまった。

似てるとは思わないが、もしも仮にそうならこの男と同じように騙されることなんて絶対にないと思うし、騙されるわけがないという確信もある。

だから俺とこのおっさんは絶対に似ていない・・・はずだ。

「今日はやけに冷えるね…」

「そうだな」

男二人で空を見上げる。

決して天気が良いわけではないけど見上げたい気分なのだ。

何となく、俺も母さんに会いたくなってきた。

「俺、ちよつと家に帰るわ」

「・・・行くんだね」

「ああ・・・ま、また来てやらねえ事もねえけど」

ブルリ、とポケットが震える。

おっさんは背を向けた俺を見つめているのか、背後から視線を感じる。

振り返れば思った通り、おっさんはこちらをじっと見つめていた。

だから、そんな顔を俺に向けるんじゃないやねえよ

「その顔、」

「・・・え」

「俺じゃなくてよ、自分の娘に見せてやれよ」

ポケットに入れてあった携帯を見せながらおっさんに手渡す。

その画面にはおっさんの娘の名前、「三坂洋子」の文字が表示されていた。

おっさんは目を見開いて、「かけ直して来たんだろ」という俺の言葉に納得していた。

「俺の前に、おっさんが先だな」

「・・・そうみたいだね」

緊張しているのか、強張った表情で携帯を見つめるおっさんに少し笑えた。

「じゃあな、携帯は明日返してくれよ」

「あ、ちよつと待って！」

「あ？」

ちよつと待ってじゃねえだろ、早く電話に出ろよ！

イライラしてちよつと低くなった声におっさんは気にすることなく大きな声で俺に向かって言った。

「君の名前を聞いても良いかい？」

「は・・・おっさん、馬鹿か？携帯のプロフみりや一発だつてのに」

「君の口から、聞きたいんだ」

既に着信が切れただろう携帯を握りしめ、真面目な顔をして言うおっさんに調子が狂う。

何だか恥ずかしくあったものの、俺はため息をつくと体ごとおっさんの方に向けた。

「菅野、菅野清澄」

「清澄、くん…いい名前だね」

「俺を知ってる奴は少なくともそんなことはいわねえよ」

「いいや、そんなことはない・・・とてもいい名前だ」

本当に調子が狂う。

目を合わせることもできなくなって、俺は直ぐに背を向けた。

「じゃあな」

「清澄君」

「・・・なんだよ」

「・・・やっぱり、何でもないよ」

「んだよ、それ・・・」

何だか少し、おっさんの言葉の続きが気になったが今の俺は顔を合わせることも気まずく気にせずそのままその場を後にすることにした。おっさんに会うまで重かった足取りも、何だかふつきれて軽くなったように思う。

これから父さんとぶつかることは何度かあると思うが、それでも一応家族だ。

あんなクズ野郎の息子というのいやだが、親子であるのに変わりはない。

俺の家族はあのクズ野郎一人しかないのだから

以前より格好悪くなったはずの自分に、少し誇らしく思える。

将来はたぶん、父さんの言う通り医者になって跡を継ぐと思う。

ただど父さんの様な医者にはならない、どうせなるなら馬鹿でも単純でも良い。

楽しけりや、それでいい。

誇りとやりがいのある仕事に就いて、糞真面目に働いて、馬鹿みたいに笑えればそれでいいじゃねえか。

「・・・俺って、やっぱりあのおっさんと似てるのかも知らねえな」

なんて、柄にもなく笑うのもたまには良いかもしれない。

静かになった公園にまだ温もりの残った缶コーヒー。

空を見上げていた男はふと手元の缶コーヒーに視線を落とす。

そしてどこか遠くを見るような目で、静かに呟いた。

「僕は、息子でもない子に・・・あんなことは言わないよ」

・・・なあ、清澄